

校長室から

校長室だより 第11号
令和4(2022)年3月24日発行
文責 宮城県宮城野高等学校
校長 佐藤 誠



<2年次課題研究FTⅡ・PSⅠ全体発表会を開催しました>

3月22日(火)の午前中、美術科・普通科の課題研究「フロンティアタイム(F T)」の2年次「F TⅡ」、総合学科の課題研究「プロジェクトスタディ(P S)」の2年次「P SⅠ」について、代表生徒による全体発表会を開催しました。体育館を会場に、1・2年次生徒全員が入って行事を行うのは2年ぶりではないかと思えます。3月1日に卒業式を挙げて、卒業生と保護者各家庭1名に参加いただいたのと同様の判断での開催となりました。

当日は、仙台第三高校から自然科学部化学班の生徒の皆さん4名にも来校いただき、レベルの高い研究発表を報告いただきました。また、本校からは、SDGsの17テーマのうちいずれかに沿ってテーマ設定して取り組んだ2年次全生徒の課題研究の中から、代表として選ばれた10本のテーマについて、グループまたは個人で発表をしてもらいました。

それに対して、生徒諸君の発表に対する指導助言者として、宮城教育大学の内山哲治教授、宮城大学の石田祐准教授、元東北大学准教授で現在貞山・北上・東名運河研究会代表世話人の後藤光亀先生、そして元小学校教員であり本校近隣の町内会役員でもあるNPO法人ぞうさんの家理事長の木村秀三さん、の4名の方に生徒諸君の発表をご覧いただき、厳しくも的確な講評と助言をいただきました。

当日の生徒諸君の発表テーマは次のとおりです。

○招待発表 仙台第三高等学校 自然科学部化学班

テーマ「銀の析出の謎に迫る ～硫酸銀水溶液に木炭・竹炭を入れておくと銀が析出するのはなぜか～」

○本校発表

<普通科・F TⅡ> (グループ研究)

- ①SDGs つくる責任つかう責任 : 「ゴミ削減を考える」
- ②SDGs 住み続けられるまちづくりを : 「観光業の活性化による地方再生」
- ③SDGs 質の高い教育をみんなに : 「英語力向上について」
- ④SDGs 陸の豊かさを守ろう : 「獣害対策と私たちができること」
- ⑤SDGs 働きがいも経済成長も : 「ディズニーの待ち時間何しよう？」
- ⑥SDGs 海の豊かさを守ろう : 「プラスチックの現状とリサイクル製品」
- ⑦SDGs ジェンダー平等を実現しよう : 「男女差別やマイノリティの人たちへの差別をなくすには」

<美術科・F TⅡ> (個人研究)

⑧「西陣織の発展と現状について」

<総合学科・P SⅠ> 現代社会や学問に関する探究的な課題研究(個人研究)【中間発表】

- ⑨「聴覚障がい者との壁を超えるために」
- ⑩「葬儀の現状と未来について」

少し補足すると、本校における課題研究は、美術科・普通科では1年次でF TⅠ、2年次でF TⅡを設定し、F TⅡではグループ研究に取り組み、まとめとしてプレゼン発表を行うことにしています。また、総合学科では1年次・2年次でP SⅠ、3年次でP SⅡを設定し、P SⅠは1年次後半から2年次前半はグループ研究、2年次後半のP SⅠと3年次P SⅡで個人研究に取り組むことにしており、今年度もその流れを継続して取り組んできています。したがって、今回の全体発表会は、美術科・普通科にあっては、今回の発表が最終的な成果発表の場であり、一方総合学科にあっては、次年度のP SⅡでの研究継続に先だっただけの成果中間発表という位置づけになっています。

また、当初の年間計画では、9月に総合学科3年次のP SⅡの成果発表会を、他校生徒も参加する形で開催する予定でしたが、コロナ禍の影響により集合開催からビデオ録画による配信発表に変更して実施することになりました。2年次の生徒諸君にとっても、総合学科3年次の生徒諸君の充実したP SⅡの成果発表を見ることができれば、それぞれの研究を進めるにあたり大いに参考になったと思いますが、結局それもかなわず、今回はいわばぶっつけ本番で全体発表に臨むことになったものと想像します。

しかし、以上のようなさまざまな制約とハンデがあったことを踏まえたとしても、本校生徒諸君の発表が、全体として物足りないところが多くあったことは否定できないと考えています。それは、指導助言者の4名の講師陣からの、厳しくも丁寧な助言の数々が物語っているものと思っています。

<質問力を鍛えよう！ 質問するためには内容理解が前提となる>

宮城野高校生は質問力が足りない、それは以前に教頭で勤務したときにも感じたことですが、今回の発表会を見て、あらためて同じ感想を持ったのです。後半の発表にはある程度の質問の手が挙がりましたが、前半の発表に対してはほとんど反応もない状態だったのは、かなり残念でした。誰かが行うプレゼン発表に対して、質問や疑問の提示、さらには提案などを行うためには、その発表内容の骨子を把握してポイントを理解し、不足のところ、評価できるところ、その他の確認すべき点などを洗い出す必要があります。“分からないところをそのままにしない”、授業でも良く聞く言葉ではないでしょうか。

<「プレゼンテーション」の考え方について紹介します>

課題研究・探究活動において、調査研究を進めるインプット活動と、成果を報告・紹介するアウトプット活動の2つの場面があります。そのアウトプット活動のうち、総合学科3年次のPSⅡでは研究論文及びポスターの作成を行います。美術科・普通科のFTⅡそして総合学科のPSⅠでは、まとめとしてスライドを作成してのプレゼンテーション発表を行っています。今回行った全体発表会では、2年生徒全員が成果のまとめとして作成したものの中から、代表の生徒諸君に発表を行っていただきました。

さて、そもそも「プレゼンテーション」とはどのようなものなのでしょうか。あらためて「プレゼンテーション」の考え方について整理してみたいと思います。

まずは言葉の意味から。英語の「プレゼンテーション presentation」は、直訳すれば「表現、紹介、提示」の意味ですが、内容としては、相手に情報を提示して企画や意図について理解を得るようになるための効果的な説明手段を指し、ビジネスの世界、特に広告業界で、実体のない広告という商品売り込むために、多くの人に知ってもらいたいテーマやこれは売り込んでおきたいという企画を効果的に説明して顧客を説得するための手法として広まりました。プレゼンテーションという言葉自体の語幹は、「プレゼント present」ですから、単純化すれば、相手に対する「贈り物」ととらえることもできます。

そのようなプレゼンテーション（略プレゼン）ですが、すでに世の中に一般的に広まっているものだから、「プレゼンのコツ」をネット検索すると、山ほどその紹介サイトがヒットします。ですから、プレゼンのコツそのものについては、生徒諸君が自分で調べてみて欲しいと思います。

<「プレゼン」は「授業」と同じものにとらえよう>

ここでは、プレゼンの考え方、プレゼンをどのようにとらえたら良いかについて、私なりの考えを紹介いたします。私は、プレゼンは、「授業」と一緒だと考えてもらうのが良いと思っています。

全体発表会では、プレゼンする人＝プレゼンターは発表者、聴衆はプロアにいる生徒全員や先生方と指導助言者でしたが、授業の場合は、プレゼンターは授業担当者＝教員、聴衆は授業に参加する生徒諸君となります。授業では、プレゼンターである教員が、知ってもらいたいテーマや伝えたい内容について、各種の情報を提示して説明し、聴衆である生徒諸君の理解を促します。

ここまで来ると、私が言いたいことが何となく分かってきたでしょうか。日々、たくさんの授業に参加し、聴衆としての立場を経験している生徒諸君は、分かりやすい授業＝良いプレゼンとはどのようなものか、実感として把握しているのではないのでしょうか。そのような観点で見たときに、全体発表会で、聴衆たる“生徒”に対して、分かりやすい「プレゼン＝授業」を行った“発表者＝先生”は誰だったのでしょうか。反対に、分かりにくい「プレゼン＝授業」は、どんなところが分かりにくかったですか。

私の40年前の思い出話を2つ紹介します。私は「質実剛健」「文武両道」を標榜する県北の男子高校を卒業しましたが、こんな先生がいました。一人は、国語の先生で、黒板に板書もせず、教卓に置いた教科書を見つめて1時間ひたすら自分一人でしゃべっている授業でした。当然、私を含めた生徒たちは、授業がつまらないので、寝てる者、弁当を食べる者、読書に励む者、そして会話して騒いでいる者など、授業は成立していませんでした。その先生があるとき、大きな声で「騒ぐんじゃない」と怒鳴ったことがありますが、一瞬は静かになったのですが、いつもの授業が再開するとまた同じ状態に戻りました。私も読書に励んでいた一人でしたが、内心「自分のせいじゃないか」と思っていました。

全体発表会の中で、生徒＝聴衆に目もくれず、ひたすらテキスト（原稿）を読み上げるような先生＝発表者はいませんでしたか。その授業＝プレゼンは分かりやすく、生徒＝聴衆を惹きつけていましたか。

もう一人は、世界史の先生で、板書の鬼でした。毎時間黒板を板書で埋め尽くし、1回消してもう一度埋め尽くすような板書量でした。当然、書くスピードも速く、さらに重要なキーワードは、口では話すものの板書の中では「()」だったり「___」しか書かず、生徒はそれを教科書を見ながら自分で埋めるという授業でした。おまけに先生が自分のペースで書き終わると、板書をさっさと消してしまうので、間に合わない生徒は他の友人から「なんて書いてあった？」などとやり取りしなければならなかったのです。本校でもコロナ対応の必要性から、オンライン授業を実施しましたが、それに対する生徒諸君の感想の中に、板書が見えにくい、スライドを消すのが早い、などさまざまな意見がありました。

全体発表会の中で、スライドの内容を生徒＝聴衆が読み終わる（把握・理解する）前に、さっさと次に移ってしまう先生＝発表者はいませんでしたか。スライドそのものが、見えにくい色使いだったり、グラフ・統計の文字が小さくて読めないものはありませんでしたか。また、問いかけ＝発問しておきながら、生徒＝聴衆の反応も見ないで、自分で答えを解説し始める先生＝発表者はいませんでしたか。

さて、これまでさまざまな点について指摘をしましたが、発表してくれた生徒諸君をいじめるつもりはありません。でも、考え方を変えるともっと素晴らしい発表になると思うので、ぜひ次に生かしていただけたらと思います。また、今まで挙げた指摘は、発表者だけではなく、全体発表に選ばれなかった人、そして次年度課題研究に本格的に取り組み、いずれプレゼン発表を行うことになる1年次の皆さんにも、ぜひ頭に置いてこれからの取り組みを進めていただきたいと思います。